

# バルザックにおける「脳」

## イメージの生成と作品世界における展開

東 辰之介

はじめに

「広大な宇宙の広大さのただ中、思考がその果てまで及び得ないような無限の物質を持つ大海原に、いくつもの太陽と世界が漂っていたが、そこにごく小さな芽、藁くずが存在した [...]。偶然に宇宙に住まう無数の種のうちの一つが、この惑星上に大量にやってくることを望んだ。しかしこの種は、驚くべき活力をもって急激に繁殖したので、この小島の表面を覆い尽くしてしまった。 [...] この動物たちはみな体の一番上のところ、その内部に、白っぽい染みを持っていた。この染みにすべての線維が集まっていたがゆえに、染みの形や大きさが動物の組織の質を決めることとなった<sup>1</sup>。」

1820年ごろの作と考えられているこのテキストは、バルザックが1818年ごろから数年にわたって書きためた数多くの初期習作の一つである。同時期に書かれた未完小説とともに初めて出版されたのが1950年のことで、1990年にはブレイヤード叢書の『初期習作集』の付録にも収録された。編者はこの2ページに満たないごく小さな断片を、『人間の歴史、哲学的ヴィジョン』と名づけている。その内容は「白っぽい染み(tache blanchâtre)」、すなわち「脳」だけが妙に生々しく記述される人間と思しき動物が、神を思ったり、互いに戦ったり、洪水に襲われたりして過ごす創世第1年目の様子を描いたもの、と要約できる。

ここで注目されるのは、「すべての線維(toutes les fibres)」が集まる「体の内部」の「白っぽい染み」といった具合に、奇妙なほど解剖学的な視線によって描かれる「脳」の存在である。このことは何を意味するのか、そして以後も繰り返し作品中に現われる「脳」のイメージはいかにして生まれたのか、

<sup>1</sup> *Histoire de l'homme, vision philosophique, Œuvres diverses de Balzac*, édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade » (以後 OD と表記), 2 vol. parus : t. I (1990), t. II (1996) ; t. I, p. 1095-1096.

こうした問いに答えるために本論では、まず19世紀初頭までの「脳」研究の歴史を概観した上で、バルザックによる「脳」研究受容の特質を検討し、その上で『人間喜劇』に現れる「脳」のイメージが作品中において果たす役割について具体的に論じてみたい。

## 19世紀初頭までの脳研究概観<sup>2</sup>

脳は古典時代・ルネサンスを通じて解剖学の対象となったが、その構造はあまりよく分からなかった。最も盛んだった解剖法はガレノスに始まる水平面切断法（脳を上部から下部に向かって輪切りにする）であったが、具体的な成果があったとは言い難い。結局のところ、左脳と右脳の分離や表面のしわなどが注目されるばかりで、内部構造に関しては大雑把な把握が続いた。

17世紀に入ると、末梢神経研究の進歩によって、脳の内部の白色物質は線維(fibres)の束なのだという考えが徐々に認められるようになる。ただしこれは白色部分に限ったことで、脳の灰色の部分、すなわち大脳皮質は、血液から運び込まれる生気を濾過して動物精気<sup>3</sup>にし、白色の部分に送り込むスポンジのようなものであると考えられたりした。現在、大脳皮質こそが高度な機能を担う部分であるとみなすわれわれからすると、ずいぶんと奇妙な説ではある。

脳の一体性がはっきりしてくるのは18世紀以降である。延髄、白色部分、灰色部分はそれぞれ線維でつながっていると主張する説が提出され、これが脳の外周を水流などで削って延髄の行き末を掘り出すというガル(Franz Joseph Gall, 1758-1828)らの画期的な解剖法によって確認される。したがって構造に関して言えば、脳は線維の束であるといったような現在でもほぼ通用する知見が、19世紀初頭には得られていたことになる。

さて、このような解剖学的記述とは別に、対象の機能についての解釈学である「生理学(physiologie)」も脳研究において大きな位置を占めていた。前者は「形」を、後者は「機能」をそれぞれ研究するのである。ただし、この「生

<sup>2</sup> 本章を書くにあたって特に参考したのは次の著作である。Georges Lanteri-Laura, *Histoire de la phrénologie, l'homme et son cerveau selon F. J. Gall*, PUF, 1993 (1<sup>ère</sup> éd. 1970), *Significant Contributions to the History of Psychology 1750-1920*, Edited and with Prefaces by Daniel N. Robinson, 1978, Washington, D.C., University Publications of America, Series E: *Physiological Psychology*, Volume II, X. Bichat, J. P. Spurzheim, P. Flourens, « Preface » (xxi-xliv).

<sup>3</sup> « esprits animaux »のこと。脳の活動エネルギーとして、その存在が長い間想定されていた。

理学」の語は現代の用法とはかなり異なったものとして理解する必要がある。というのは、現代の一般的な了解からすれば実験・観察を経て真であると認められたものだけが「生理学」の成果となるのに対し、以前は脳の機能であると考えられるものすべてを寄せ集めて脳の「生理学」と称したからである。

では、脳の生理学すなわち機能研究が、現在のような形になったのはいつのことか。先回りして言うなら、一つの大きな区切りとして1861年を挙げることができるであろう。これは、あるタイプの失語症が脳のある一定の箇所の損傷に由来することをブローカ(Pierre Paul Broca, 1824-1888)が発見した年である。これ以後においては、生理学は現在われわれが目にするような実験を前提としたものになってゆく。

したがって、バルザック(1799-1850)の生きた時代に至るまでは、脳機能についての議論は実証的な裏付けを欠き、とかく紛糾しがちであったと考えてよい。古代にまで再びさかのぼって議論の流れを追ってみるなら、まず思考や感情が脳の機能であると考えたヒポクラテスが注目される。このごく単純に見える主張は、実は画期的なものであった。なぜなら、思考はともかく感情・心については心臓にあると考えるのが当時の常識だったからだ。感情についても脳の機能であると認められるようになるのは、心臓の機能として血液循環が発見される17世紀を待たねばならない。

また、脳機能の全体がいかなるものであるかを決定しようとする議論と同時に、脳の機能であると考えられるさまざまな能力が、脳のある一部分だけを使って発揮されるものなのか、それとも脳の全体を必要とするものなのか、という議論が盛んになされた。このため、図式化を恐れずに言うなら、前者の考えを支持する局在論者(localisateurs)と後者を支持する一元論者(unitaires)の二つの流派が常に並存していた。

局在説はプラトンやガレノス以来あったが、位置づけるためには脳を複数の部分に分けなければならず、また、精神活動全体から他の機能と弁別可能な一機能を抽出することも必要になるため議論が百出した。たとえば、中世のネメジウス(Nemesius)は想像力は脳の前、理性は中、記憶力は後にあると主張したが、なぜ想像力、理性、記憶力なのか、そしてなぜ順に前、中、後なのかと当然問われることになる。とはいえ、脳は部分ごとに機能している、という局在説の教義そのものは、解剖学的な根拠はないながら17世紀にトマス・ウィリス(Thomas Willis, 1621-1675)によって固められた。

他方で、意識の単一性という直感から出発して、脳の一元性を主張する者たちがいた。その場合は、身体と精神の結び目が脳のどのレベルにあるかが

問題となるが、これこそが松果腺(glande pinéale)を中心に脳を論じるデカルトの方向に他ならない。

18世紀には3つの潮流が認められる。それまでの研究史を疑いを挟みつつまとめる大学人、反局在説のデュヴェルネ(Duverney)、局在説のシャルル・ボネ(Charles Bonnet, 1720-1793)である。デュヴェルネは、大脳を理性、小脳を感情とした上でさらに大脳内の区分をしたウィリスを批判して、大脳を意志的、小脳を無意識的とした上で大脳内の区分はないとした。感覚論者であるボネは、さまざまな感覚器官から脳に向かってゆく神経の終点がその感覚を感じる場所だとして、大脳定位説を単なる仮説の段階から検証可能なものにする道筋をつけた。

さて、19世紀に入ってから脳の「生理学」の行方であるが、これについては局在説の最右翼と言うべきガルの骨相学(phrénologie)ぬきに語ることはできない。この骨相学という訳語は、人相学との類推で、頭蓋骨の突起具合を計測することによって個人の性格を見抜くことが可能であるとするこの学問の特徴を伝えるべく一般に使用されているものであるが、もともとフレノロジーという言葉が「心の研究」を意味するギリシア語から作られていることをまったく感じさせないという欠点も持つ<sup>4</sup>。脳解剖学者であったガルにとっての理想は脳の凹凸を計測することであり、頭蓋骨を利用したのは、軟らかく壊れやすい脳を、しかも死後の変性前に大量に調べてデータ化するのは不可能であると考えたがゆえなのである<sup>5</sup>。

いずれにせよ、ガルの骨相学は、脳の脳大皮質に知的・精神的諸器官があると断定する局在説である。しかしながら(言うまでもなく)、当時一流の脳解剖学者であったガルの業績を持ってしても、実際大脳のいかなる部分にいかなる機能が割り当てられているのかを、解剖学的に明らかにすることは不可能であった。そこで、ガルが証明の労を取らずに提出する仮説、すなわち、脳のある部分の引っ張りはその部分に割り当てられた機能の平均以上の発達を意味している、という仮説の上に、脳に関する彼の生理学が構築されることになる。後はさまざまな偏執病者の死後に、かれらの頭蓋骨を何千と計測してデータをストックし、統計的に処理しさえすればよい。

ガルの骨相学は、彼の死後、七月王政期のフランスに広まった。その理由

<sup>4</sup> フレノロジー(phrénologie)と名づけたのは、ガルの同僚シュブルツハイム(Spurzheim)である。

<sup>5</sup> ガルは、頭蓋が軟骨から骨に変わるという当時の発生学の仮説をもって、頭蓋骨が脳の形に正確に一致しているという自らの主張の根拠とした。

として最も大きかったのはパリにおける正統派の医学者ブルセ(Broussais, 1772-1838)が骨相学を正式な学問として認めたことである。ブルセは骨相学協会(1831)事務長となり、*Journal de la Société phrénologique de Paris* が創刊された。しかし、もともと人間の内面を外見的特徴によって推し量りたい、というごく一般の人々の欲望と一致したがゆえに繁栄したこの学問は徐々に世俗化を深める。ガルの解剖学者としての業績に学位を授けた学士院のキュヴィエ(Cuvier)は、決して骨相学を認めなかったし、デカルトの伝統を重んじるフルランス(Flourens)など多くのパリ大学の医学者たちは、大脳についての局在説を厳しく批判した。こうして、ブローカが脳の生理学のパラダイムを1861年に変えてしまうまで、局在論者と一元論者の対立は続くことになる。

以上が、19世紀初頭にいたる脳の解剖学と生理学の粗描であるが、脳の発達を扱う発生学や、動物の脳と人間の脳を比較考察する比較解剖学なども、脳研究の一角を占めていたことを付記しておく。

#### バルザックによる脳研究の受容、あるいは実践

では、ごく若い時期に解剖学的に正しく、「すべての線維」が集まる「体の内部」の「白っぽい染み」として「脳」を描いてみせたバルザックの「脳」に対する興味とはいかなるものであったのか。これについて考えるには、作家を志すにあたってバルザックが、人間存在の根源について深く思索し、その定義を自分なりに構築しようとしていたということを思い出すべきであろう。人間についての思索を進める途上で、当然ながら魂・精神といった問題が現われ、これについて形而上学的な議論を避けて科学的に考察しようという意図が強く働いた結果、「脳」へ興味が生じたものと推測されるからである<sup>6</sup>。

このことは例えば『魂の不死に関する論考』という未完の作品において顕著である。このテキストは草稿の形でのみ残されており、これまでマルブラ

<sup>6</sup> バルザック初期の哲学思想については、以下の論考に詳しい。長崎広次「Balzacの初期の哲学思想(I)―当時の思想環境と *Notes philosophiques* (1)」『広島大学教養学部紀要 I「外国文学研究」』vol. XV, 1968, p. 255-287。「Balzacの初期の哲学思想(II)―最初の論文« *Dissertation sur l'homme, son génie*»」『フランス文学』(日本フランス語フランス文学会中国・四国支部機関誌)第10・11号、p. 243-287。「バルザックの初期の哲学思想(III)―*Notes philosophiques*(2)」『広島大学同紀要』vol. XVI, 1969, p. 61-160。「Balzacの初期の哲学思想(IV)―Falthurneとその哲学、宗教、社会、道徳、文学思想」同『紀要』vol. XVII, 1970, p. 1-66。

ンシュやデカルトについての覚え書きと合わせて『哲学的ノート(Notes philosophiques)』として出版されていたのであるが、バルザックの作品構想の意図を汲んだ1990年のプレイヤード版では独立させてある。この草稿冒頭に、「Immo < rtaité > de l'âme」及び「1818」と、バルザック自身の手による最も古い年代が記入されているため、『初期習作集』の冒頭に置かれることになった。バルザックは1818年ごろから、数年にわたってこの草稿を書きためたものと考えられている。

この『魂の不死に関する論考』におけるバルザックの命題は明確で、「魂は不死であるという考えは人間の自愛心によって生まれた迷信にすぎない」というものである。バルザックがこう主張するに至った経緯としては、感覚論者であるカバニスやイデオログが否定した魂の不死を、王政復古下の反動思想家として知られるアカデミシアン、ボナルドが復活させる様子が青年にとっては唾棄すべき旧習への回帰にしか見えなかったであろうこと、さらにはバルザックの父ベルナール・フランソワがまさしく啓蒙の人であったことなどが挙げられるだろう。いずれにせよ、バルザックはさまざまな角度から魂が不死ではないことの証明に努めるのだが、残されたテキストは箇条書きの文章や、考察すべき事柄についての覚え書きの集積といった様相を呈している。

さて、魂の「non-immortalité」を証明するにあたって、バルザックが用いる論理の一つに「魂は身体の一部である脳に依存している、よって魂は脳=身体と同時に滅びる」というものがある。バルザックは、魂を脳という容れ物から取り出し可能なある種の靈的実体としてではなく、脳という器官に内在する物質的実体としてとらえたのである。こうしてバルザックは魂を「匂いの粒子よりももっと軽く」、匂いや光よりも「一億倍も伝達がたやすい」物質によってできた「湖」に喩え、これが脳内にあるものと想像してみるよう読者に呼びかけた上で、こう続ける。

その上、脳にはあらゆる線維が達していて、それらの線維に対応するあらゆる血管、管、などなどは、身体に空気と運動を送り込んでいる。しかも、血液全体を常に新しくする活力に恵まれた心臓には、栄養分があらたな精気を絶え間なく運び込み、心臓が形成する一種のボイラーから連続的に立ち上る蒸気を供給している。このボイラーから出る煙が脳の湖を動かすのだ。このことは、生命がなぜ脳と心臓にかくも起因するのかを説明するように思われる。加えてさらに、両端が神経叢となっている五感の線維があって、これらは湖に感覚を常に伝達するのに忙しい。伝えられた感覚は湖に、子どもが小石によって表面を

かすめるかのような効果を及ぼすのである<sup>7</sup>。

バルザックはここで、脳には体全体から線維が集まっているという事実を踏まえた上で、魂を線維から感覚の伝達を受ける物質的なものとして理解しようと努めている。しかしながら、その魂がいったい脳のどこにあるのかといったことは問題にならず、ただ漠然と脳の中に湖のようなものがあってそれが魂だとするばかりであるのは若干奇妙である。要するにバルザックは、解剖学的な事実は踏まえながらも、それだけでは説明のつかない事柄については想像によって補うほかないという当時の脳の「生理学」からすればごく普通に是認される考えのもとで、自分なりの脳理解を構築したのだといえよう。

もちろん、この『魂の不死に関する論考』を執筆するにあたって、バルザックはさまざまな資料に目を通してしている。作品中にロックの著作への参照を促す箇所があるし<sup>8</sup>、マルブランシュ、デカルトについては反論を中心としたコメント付きのノートが残されている<sup>9</sup>。しかしながら、ロック以後の感覚論、たとえばコンディヤックやカバニスへの言及はなく、また同時代の作家家についてもまったく扱われることがないなど、プラトンを始めとする古典のみを糧とした若き独学者の習作という性格が際立っている。

同時代の知からやや切り離された観のあるこの『魂の不死に関する論考』の性格は、引用した「脳」の記述についてもあてはまる。同時代の学者の名前が引用されることはないのである。とはいえ実際に出来上がったバルザックの記述が特に独創的ということはなく、例えばデカルトの『哲学原理』には既に同じような説明がなされていたし<sup>10</sup>、五感について別々の線維を想定しているあたりは、シャルル・ボネの著作からの影響も考えられる<sup>11</sup>。確実

<sup>7</sup> *Discours sur l'immortalité de l'âme*, OD, t. I, p. 538-539.

<sup>8</sup> *Ibid.*, p. 545.

<sup>9</sup> *Lectures de philosophes*, OD, t. I, p. 563-589.

<sup>10</sup> デカルトによる人間の脳についての主著は『情念論』だが、バルザックがこれを読んだという確証はない。これに対して、『哲学原理』については第二部までに関して読書ノートが残されており、その後第四部まで目を通した可能性がある。デカルト『哲学原理』、第四部、189節「神経は糸に似ており、脳髄から身体の他の全部分に拡がり、それらの部分と緊密に結びついていて、身体はどこか一部が触れると、ほとんど必ずその部分のまわりに拡がっている神経のどこかの末端がそれによって動かされるようになっている。さらにこの末端の運動は〔その神経を介して〕脳髄の中の心の場所の周囲に集まっている他の末端まで伝えられるようになっている […]」(『デカルト著作集』3、白水社、1973年、p. 146)

<sup>11</sup> 1820年頃に書かれたと思われるバルザックのメモ書きに、ボネの著作 *Essai*

なことは言えないが、直接間接に読んだ作家の記述を折衷し、想像力を膨らませた上で、脳及びその内部にあるとされる魂の機械性を強調した結果生じたのが、上記のイメージなのではないかと推測される。

ただし、脳内にある湖についての説明はまだ終わりではない。上記の引用部分によってバルザックは、魂がいかに関知を察知するのかを明らかにしたことになるが、より高度な精神機能についての説明が残っている。バルザックは以下のように続ける。

非常に優れた性質を持つこの湖の上で、震えがつつぎに伝わって全体にめぐり、後に記憶によって再生できるよう底までも伝達されるさまをごらん下さい。[……] あなたはこう言うかもしれない、「それは実に結構なことだ、しかしいったいどこに意志と思考能力があるのか」と。

私はこう答える。「この構造から立ち上るまばゆい蒸気こそが思考の正体であり、この思考をうまく方向づけることで想像力や判断などが生まれるのだ、と考えることはそれほどおかしなことだろうか」と。[……] もしあなたがまだためらっているなら、世界を創造した永遠の原理の力を思ってください。そうすれば私は、思うにこれまでの解説者と同程度に説得的なやり方で魂の神秘を説明することができるであろう。その際、私はわれわれの誤謬と罪をその神聖な性質に結び付けることで至高の存在を侮辱する必要はないし、誤謬や罪といったものの原理までも至高の存在と同じく不朽と考えたりせずに済むのである<sup>12</sup>。

バルザックはここで、湖の比喩を使いながら記憶のメカニズムの説明を試みている。そしてさらに、湖から立ち上る蒸気が思考であり、それをうまく制御することで想像力や判断になるとする。しかしながら、ならばいかにしてその思考の制御が可能なのかといった意志の問題など、その他もろもろの面倒な現象に関しては、説明原理を完全に変更してしまっている。いわく、世界を創造した神が人間の魂を人間の理解の及ばないような機械として作り上げたと考えて何の問題があろう、人間の不浄な魂を聖なる存在の一部と考えるよりもずっとましではないか、と。

おそらく、当時のバルザックの次のように考えていたのであろう。人間は一個の機械にすぎず魂もその一部なのだ、このことは脳についての研究が進めば明らかになるだろうが、今はその見込みだけで十分だ、と。それゆえ引

---

*analytique des facultés de l'âme* への言及がある（このメモの詳細については、*OD*, t. I, p. 1472 を参照）。

<sup>12</sup> *Discours sur l'immortalité de l'âme*, *OD*, t. I, p. 539.



用部分に見られるように、必ずしも脳の中にある魂について科学的説明ができなくても構わないことになる。

結局のところ、バルザックの興味は「脳」研究そのものにあつたのではなく、「脳」研究がいかに魂や人間についての全体的理解を深めてくれるような成果を出しているのか、という点にあつたのである。結果として、本論冒頭で見たように文明以前の太古の人間を描くにあたっては既に明らかとなっている「脳」の構造の描写を利用するけれども、科学的に解明されていない人間の高度な精神能力については、むしろ自分の想像力や神の摂理を信用するということになる。この二つの態度の間に矛盾はないと言えるだろう。

\*-

バルザックが『人間喜劇』の一部となる作品を書きあげるに至るのは随分と先のことになるが、その頃になってもこの「脳」についての思索は若干形を変えて続けられる。とりわけ「思考は人を殺す」という命題がさまざまに変奏されて表現される作品群、すなわち「哲学的」とバルザックが形容する作品群において、この「脳」へのこだわりが顕著である<sup>13</sup>。それらの作品が、1834年に『哲学的研究』というタイトルの下にまとめられたときの序文が、青年期の脳研究をいくぶんか大げさに回顧するのは、この連続性を強調するためなのであろう<sup>14</sup>。

しかしながら、先ほど述べたように、バルザックの興味は「脳」研究そのものよりは精神作用一般にあつたため、例えば「意志」とは何か、という問題に答えるにあたって、「脳」のイメージは次のように随分単純化されてしまふ。

脳はフラスコのようなもので、「動物」は自分の体組織が「実体」から吸収し得るものをこの器官の力に応じてそこへ運び入れ、「実体」はそこから意志となって出てくる<sup>15</sup>。

<sup>13</sup> 特に注目される例として、記憶喪失 (*Adieu, La Comédie humaine*, nouvelle édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1976-1981, 12 vol.(以後 CH と表記); t. X, p. 973-1014) や、テレパシー (*Le Réquisitionnaire*, CH, t. X, p. 1105-1120) についての考察が挙げられる。

<sup>14</sup> 「1818、1819、1820年の間、バルザック氏は[...] 古代、中世及び前二世紀の哲学者や医者たちが人間の脳について残した著作を比較し、分析し、要約するという仕事に熱心に励んだ。彼の精神の傾向にはこのような偏愛があつたのだ。」Félix Davin, < Introduction > aux *Études philosophiques*, CH, t. X, p. 1203.

<sup>15</sup> Louis Lambert, CH, t. XI, p. 685.

もちろん、これは小説の主人公ルイ・ランベールが切れ切れに遺した学説の一部であって、これをバルザックの考えとするわけにはいかないのだが、脳を「意志」という流体の生成器官と考えてフラスコといった単純な容器に喩え、その多様な機能について頓着しないといった点は、当時の常識からしてもずいぶんと奇妙なものであったろうと考えられる。この科学的な「脳」研究からの今まで以上の乖離は、『ルイ・ランベール』の草稿では冒頭近くで掲げられていた「今日、人間の脳こそは興味深い研究の対象ではなからうか<sup>16</sup>」という文章が削除される一方で、主人公ルイが稿を重ねるにつれて神秘主義の思索家という側面を強めてゆくことなどからも明白であると言えるだろう<sup>17</sup>。

同時代の「脳」に関する科学的な知にしても、バルザックが特に深く研究した様子は見られない。例えばバルザックは、クルブ(Couerbe)という人物の脳研究について書簡中で言及し<sup>18</sup>、さらに『絶対の探求』の主人公バルタザール・クラスに以下のように説明させている。

人間はフラスコのようなものだ。だからわたしの考えでは人間は、脳内のリンあるいはまったく別の電磁氣的な物質<sup>19</sup>がひどく不足していると白痴、あまりにも過剰だと狂人、やや足りないくらいだと常人、適切な程度に飽和していると天才になるのだ<sup>20</sup>。

ここで言われている内容は、クルブの説を正確に反映したものであり、その限りにおいてバルザックは、同時代の脳研究の動向に敏感であったと言える。ただし、これには留保が必要となる。実はクルブの論文『脳について—化学的・生理学的観点からの考察』(*Du Cerveau, considéré sous le point de vue chimique et physiologique*)を審査した科学アカデミーは、その化学的な観察については業績として認めたものの、生理学的な仮説、すなわちリンの多寡に

<sup>16</sup> Louis Lambert, *CH*, t. XI, p. 1502, la var. d de la p. 589.

<sup>17</sup> Henri Evans, *Louis Lambert et la philosophie de Balzac*, José Corti, 1951, p. 133 を参照。

<sup>18</sup> 「ある若い化学者が最近脳を分析したのですが、彼は私の体系を証拠立てるような発見を一つして、私が証明したいと思っていたことを証明してくれました。脳に浸透しているリンは多かったり少なかったりするということです。」(*Correspondance, textes réunis, classés et annotés par Roger Pierrot, Garnier, 1960-1969, 5 vol.*(以後 *Corr.* と表記); t. II, p. 500, [mai (?) 1834])

<sup>19</sup> バルザックは神経が電気を発生させることをはじめて証明したガルヴァーニ(Galvani, 1737-1798)と、動物磁気説を唱えパリで催眠療法を行ったメスマー(Mesmer, 1734-1815)にしばしば言及する。バルザックにとって電磁気現象は人体を考察する上で無視できない要素であった。

<sup>20</sup> *La Recherche de l'Absolu, CH*, t. X, p. 720

よって高度な精神活動の機能の良し悪しまでも決まるという仮説に関しては根拠なしとしたのである<sup>21</sup>。ごく単純な物質に人間の性質が規定されているというような、分かりやすく、スキャンダラスな学説は一般に歓迎されやすく、このクラブの説もジャーナリズムによって広く伝えられたが、バルザックもそのような形でごく反射的にしかこの学説を受容していないように思われる。

当時もっとも流行していた骨相学にしても、バルザックはその一面しか見ていなかったようだ。確かに、バルザックは骨相学に対して終始一貫して熱狂的な賛意を寄せており、『ゴリオ爺さん』において青年医師ピアンションによるゴリオ観察の確実さを骨相学の成果として表現するなど、骨相学の理論を作品中の人物描写や物語展開のために巧みに利用してはいる<sup>22</sup>。ところが、このような観察法を可能にする骨相学の基本的な仮説、すなわち頭蓋骨を見れば脳の特徴が分かり、脳の特徴が分かれば人間が分かるという大脳局在説に基づく仮説に関して言えば、バルザックはこれに完全には理解していなかったようなのである<sup>23</sup>。バルザックにおける骨相学の影響は、人間を外面によって知するというその実用面が中心で、こと脳の理解に関してはほとんどなかったと考えるべきであろう。

こうしてバルザックは「脳」を理解するにあたって、ときおり同時代の脳研究に言及しながらも自らの直感に頼むという基本的態度を変えることはなく、結果として『ルイ・ランベール』で描かれた「外部から何らかの補給を得て精神力を生み出すフラスコ」といったようなごく分かりやすいイメージをその作品中で最も多く用いることになる。このような単純化されたイメージは科学的とも哲学的とも言い難く、バルザックの「脳」に対する興味がさほど真剣なものではなかったことを一方で示しているかもしれない。しかしながら他方バルザックが、「脳」を何にもまして創作活動をするための器官としてとらえていたであろうことを考えれば、「脳」をそこから作品を引き出すべき容器のようなものとしてイメージするのは、作家の直感的真実としてはごく妥当なことであったとも言えるであろう。バルザックは確かに「脳」を

<sup>21</sup> 詳細については、Moïse Le Yaouanc, « Notes balzacienes », *Revue d'histoire littéraire de la France*, 1953, p. 519-525 を参照。

<sup>22</sup> Hiroshi Matsumura, « Le Père Goriot : Science(s) et narration de la physionomie », *Equinoxe*, 2001, n° 19, pp. 44-54 に詳しい。

<sup>23</sup> 「人間の脳(cervelle)は一曲のオペラ、知られざる深淵です。ガルのようにその周りを回った人たちにも理解されていません、と医者は叫んだ。」(Massimilla Doni, *CH*, t. X, p. 576) バルザックのガル理解の詳細については Henri Evans, *op. cit.*, p. 142-145 を参照。

多角的に理解しようと努めはしたが、その絶え間ない創作活動という日常的経験から得た直感の方こそが最終的にその作品の糧となっていくのである。このような観点から、バルザックの青年期にまで再び戻って「脳」にまつわるバルザックの直感的なイメージの生成、および『人間喜劇』におけるその展開について考察してみたい。

### 「脳」と創造、そして金銭

バルザックは一般に多作の小説家として知られている。これはフランス文学史が教える事実であろう。しかしながら、その執筆がいつでも滞りなく進んだかといえば、もちろん否である。バルザックといえども進まぬ執筆作業にしばしば頭を悩ませたことは、残された書簡から明らかである。

ここで注目されるのが、このような不調をしばしばバルザックが「脳」の不調として描き出している点である。1822年の始めに書かれたと推測される『わが人生のある時』は、当時バルザックが用いていた筆名であるローヌ卿<sup>24</sup>が「私」として登場する未完の一人称小説であるが、このローヌ卿＝バルザックは、作家に襲いかかる不調を次のように説明する。

作家がおかれる状態の中でも、想像力が疲労困憊してしまったときほど悲しむべき状態はない。人が魂と呼ぶところのもの、すなわち感覚の駆け巡る道々が終着する結合点、不可侵かつ幾何学的な点において、観念の物質が欠乏するのだ。線維はもはや観念の原料を運んではくれず、魂は休耕状態に(en jachère)おかれる<sup>25</sup>。

ここで「魂」は『魂の不死に関する論考』において説明されていたのと同じように、脳内の物質的な実体としてイメージされている。そうでなければ「感覚の駆け巡る道々が終着する結合点」という「脳」を喚起する表現が、魂を説明するために用いられたりもしないであろう。「魂」の在処である「脳」において「観念の材料」が欠乏すると作家は不調に陥る、という図式がここには読み取れる。精神作用を物質的に説明しようとするに点において、この

<sup>24</sup> « Lord R'hoone » は、バルザックの名オノレ(Honoré)のアナグラム。

<sup>25</sup> *Une heure de ma vie*, OD, t. I, p. 871. ちなみに、この作品で語られる内容は、バルザックが悲劇『クロムウェル』を書いていた頃の実体験をもとにしたものと推測されている(Notice, p. 1505)。実際、当時のバルザックは友人に宛ててこう書いている。「イギリスの叛逆者たちにあんまり疲れたから、2週間ばかり脳を休める(reposer la cervelle)ことにした。」(Corr., t. I, p. 45, à Théodore Dablin, vers le 21 septembre 1819)

箇所の基本的発想は『魂の不死に関する論考』といった哲学的習作と共通しているといえよう。

しかしながら、「休耕状態」という表現に注目すると「脳」の扱い方のスタンスが一変していることが分かる。哲学的習作においては、「脳」がいかなる構造をしていて、どのように機能するのかを科学的あるいは直感的に「理解」することが眼目だったのに対し、ここにおいては作家が「脳」をいかに「活用」するかが関心事となっているのだ。それゆえ、「脳」や「魂」は先に見たような「湖」ではなくて、生産の場たる畑に喩えられねばならず、その生産中止は「休耕」という表現を得ることになる。

このような生産の場、生産する力としての「脳」のイメージは、バルザックの書簡に繰り返し現われてくる。バルザックは、作品を生み出す「脳」を「私の脳の畑、文学的ブドウ畑、知的森林の生産物<sup>26</sup>」と言って誇示したり、筆が進まないときには逆に「疲れきった馬<sup>27</sup>」に喩えたりしている。

では「脳」はその生産力を回復するために、いかなる処置を必要とするのか。『わが人生のある時』の語り手ローヌ卿は、いくつかの解決法（飲み食いする、愛人に会う、八つ当たりをする、爪を噛む、何もしない）などを退けた後で、パリの散歩に出掛ける。町並みが与えてくれる新鮮な感覚が再び「脳」に「観念の原料」を補給してくれると考えるからである。「脳」の中にある「魂」がその糧を感覚神経から得ているという図式からすれば、ごく筋の通った解決法であろう。同様にバルザックは実人生においても、しばしばこのような散歩をするのだが、特に「脳」の疲れがひどいときには、散歩以上の遠出、すなわち旅行を切望するようになる。1835年5月にバルザックはウィーンにいたが、そこから編集者ヴェルデに宛ててこう書いている。

6月10日にはパリに戻ります。ここで15日間たつぷりと仕事をしますが、帰りの旅行で脳の生気を取り戻せば、着いてすぐに2回分の配本の用意も、『ピロトー』の準備もできるでしょう。考えを一新するためにもこの旅行はぜひ必要だったのです。身体的疲労はこの際なんの害もありません<sup>28</sup>。

ここで書かれているような見込みがすんなり実現された形跡はないが、とにかく仕事と旅行のサイクルをうまく組み合わせて、脳の生産性を高く維持

<sup>26</sup> *Corr.*, t. II, p. 739 (à Laure Surville, 26 octobre 1835)

<sup>27</sup> *Lettres à madame Hanska*, édition établie par Roger Pierrot, Laffont, « Bouquins », 1990, 2 vol. (以後 *LHB* と表記), t. I, p. 322 (12 juin 1836)

<sup>28</sup> *Corr.*, t. II, p. 675 (à Edmond Werdet, 18 mai 1835) 「2回分の配本」とあるのは、当時バルザックとヴェルデが準備していた『哲学的研究』のこと。

することが、バルザックの望みであつたようだ<sup>29</sup>。

ならば実際にバルザックが「脳」の活動と休憩を自由に繰り返すことができたかといえ、もちろんそうではなかった。借金の返済に迫られる身であつたため、休みなく作品を生み出す必要に迫られていたからである。書簡中で嘆いているように、バルザックは、書くためには旅行が必要だが、旅行するには金が必要、ところが金を手に入れるためには書かなければならないといったような「悪循環<sup>30</sup>」にしばしば陥ることとなった。財産や年金といった安定した経済的基盤なしに、作品の出版から得られる収入のみによって生計を立ててゆくバルザックの作家生活において「脳」は、金銭の必要に合わせて生産しなければならないのである。

待ったなしの金の必要、なぜなら生活しなければなりませんし、毎月 500 フランを私のインク壺と脳の中に見つけなければならないからです、この絶えざる創造を余儀なくする金の必要が、12 月 25 日から 28 日の 3 日間で『オノリーヌ』を私に書かせたばかりの今、これから 3 日間で『最後の愛』を書かせようとしているのです<sup>31</sup>。

「脳」が自然のサイクルを模した生産・休養の循環からはずれ、絶え間なく金銭を生み出すことを強いられると、もはや持続的に利用可能な生産の場としての「畑」の比喩は適当でなくなってくる。「畑」仕事のように、時間をかけてゆっくりと準備をし、1 年にひとつ作品を完成するといったペースでは不十分なのである。インクのように次々と消費されてゆく「脳」は、金銭の必要に応じて年中生産しなければならないし、それも急いでやらなければならない。バルザックは、このような過酷な労働条件を表現するにあたって、自分の仕事の地であるフランス・特にパリが「脳」を食らうのだ、という比喩を用いるに至っている。

知的戦場というのは、人が死ぬ戦場(champs)や種蒔きをする畑(champs)よりも、耕すのに疲れるものなのです。よく知っておいてください。フランスはかつて貴族の頭を切り落としましたが、いまや人間の脳みそを飲むようになったのです<sup>32</sup>。

<sup>29</sup> 他にも次のような例がある。「トゥーレーヌが私の疲れを癒し、脳をもとに戻してくれました」(LHB, t. I, p. 332, juillet-août 1836)

<sup>30</sup> LHB, t. I, p. 574 (20 ou 21 avril 1842)

<sup>31</sup> LHB, t. I, p. 633-634 (20 janvier 1843)ただし、1843 年の 1 月と 2 月に『オノリーヌ』は大幅に手直しされ、『最後の愛』は書かれなかった。

<sup>32</sup> LHB, t. I, p. 268 (23 août 1835)

今日はここまでしかお手紙を書くことができません。著作に取りかからなくてはなりませんし、なにかしら才気に似たようなものを作り出さなくてはならないからです。パリは脳みそのフライを食って生きているのです<sup>33</sup>。

バルザックの創造活動は、自らの借金や浪費癖のゆえに絶え間なく金銭の必要に応える必要があったし、パリの出版産業が要求するノルマも果たさねばならなかった。その苛烈さのゆえに、「食われる脳」というグロテスクなイメージがバルザックの筆の下に生じたのであろう。こうして見てくると、バルザックにおいて創造する「脳」のイメージは、大きく分けて二通りに分類されるように思われる。まず一つは、始めに紹介した理想的な創造状態を表現する「煙」のイメージで、この場合「脳」は循環的に利用可能な生産器官として立ち現われる。もう一つは、おそらくバルザック自身が苦しめられていた現実の創造状態を表現するもので、むしろ「金鉱」的なイメージ群を形成する。このイメージは金銭への渴望だけでなく、一度採ったらその分は失われるということから、いつ訪れるや知れぬ創造力枯渇に対する不安も喚起する。

この二つの対照的なイメージは、特にどちらが先行するということもなくバルザックの書簡中に並存しているわけであるが、この双方を実に効果的に配した作品が『幻滅』、特にその第二部の『パリにおける田舎の偉人』である。結論から言うと、学問・芸術上の仕事の大成を目標に、こつこつと努力を続ける青年たちのグループ「セナークル」の世界では「脳」＝「煙」のイメージが使用され、金銭がすべてを決め記事を書くにもほとんど準備がいらぬ「ジャーナリズム」の世界では「脳」＝「金鉱」のイメージが用いられている。

『幻滅』第二部において、主人公である詩人のリュシアンは文学的名声を求めてパリ暮らしを始めるが、ほどなく二人の友人が現われる。一人は「セナークル」の一員で作家志望のダルテス、もう一人は既に文学への夢を捨てたジャーナリスト、ルストーである。リュシアンはダルテスとルストーの互いに相反する忠告の間を揺れつつも、結局はジャーナリズムの世界へ身を投じることになる。つまり、ごく単純化するなら主人公リュシアンは「セナークル」の世界から「ジャーナリズム」の世界へと移動するわけであるが、これに応じて「脳」の描写も変化する。

まず「脳」＝「煙」のイメージであるが、リュシアンが自作の小説や創作

---

<sup>33</sup> LHB, t. I, p. 626 (21 décembre 1842)

活動一般に関してダルテスから目の覚めるような助言をもらったときの状態は次のように書かれている。

田舎者の唇は燃える炭火に触れられたのだ。そしてパリの勤勉家の言葉はアングレームの詩人の脳に、準備の整った土地(terre)を見出した。リュシアンは作品の改作にとりかかった<sup>34</sup>。

ここでは、ダルテスの助言をすぐに受け入れて実行するだけの力量をリュシアンは持っていたということが、種を受け入れる「土地」がリュシアンの「脳」にあったというイメージによって表現されている。こういった表現からは、時間をじっくりかけた創造行為や、いずれやってくるであろう豊饒の時の予感といったものが喚起されていると言えるであろう。「セナークル」の一員であるミシェル・クレチアンもまた、「脳」の語こそ使わないものの、仕事を進めるやり方として「われわれは種子をまき、水をやり、ずっといいものを作るのさ<sup>35</sup>」と言っている。リュシアンが「セナークル」の側にいる間は、「脳」＝「畑」のイメージが優勢なのである。

これに対して、「ジャーナリズム」の側のルストーは「まかれた種がちつとも芽生えることのない畝を魂に<sup>36</sup>」持っているとされる。ここで『魂の不死に関する論考』以来の「魂」＝「脳」の図式を思いだせば、ルストーの「脳」は「畑」としては不毛であって、じっくりと一つの作品を作り出すことはできないものとして表現されているとみなすことが可能だろう。とはいえ、「11時から真夜中までの間に通いや、執筆者の家や、印刷所で<sup>37</sup>」ある種の新聞記事を即興するだけならば手間暇のかかる「畑」のような「脳」は必要ないし、邪魔でさえある。はたして、リュシアンがジャーナリズムの世界に入り込んでゆくと、ダルテスの言葉を受け入れた「脳」＝「畑」のイメージは消えてゆき、しばらくすると「机の前に座ったら、すぐ才気を出さなくてはいけないなんて<sup>38</sup>」という嘆きの声が詩人の口から聞かれるようになる。そして最終的には、新聞社の受付をしている老人から、次のような言葉をかけられるに至る。

「若い人」老軍人はそう呼んで、リュシアンの額をちよつとたたき、「あんた

<sup>34</sup> *Illusions perdues*, CH, t. V, p. 314

<sup>35</sup> *Ibid.*, p. 326

<sup>36</sup> *Ibid.*, p. 297

<sup>37</sup> *Ibid.*, p. 333

<sup>38</sup> *Ibid.*, p. 390



はここに金鉱を持ってなさる。わしは文士じゃないが、あんたの記事、あれは読みましたよ。面白かった。いや、たいしたもんだ。愉快だしね。で、わしはこう言った。『定期購読者がおしけてくるぞ』とね。そしたらやっぱりやってきた。バラでも50部売れたよ<sup>39</sup>。』

面白い記事をひねり出すリュシアン「脳」は一種の「金鉱」であって、定期購読者を喜ばせるばかりでなく、一部買いの客も引き寄せる。集客力のある記者を新聞社が歓迎するのは当然であろう。しかしながら、そうやって新聞社と執筆者の懐を富ませる「脳」＝「金鉱」は、果たして無限に採掘可能なのであろうか。ジャーナリズムの世界に長く暮らす批評家として登場するクロード・ヴィニョンは、「高濃度の蒸留酒(trois-six)」や「水銀」の比喩を用いてその採取についてまわる危険を語り、またリュシアンを待ち受けている運命を予言する。

新聞は忘恩にかけては国王以上で、投機や打算においては最も汚い商売以上だということをおれわれはみな知っている。また、新聞が脳の蒸留酒を毎朝売って、いずれわれわれの知力を食い尽くしてしまうってことも分かっている。それでも、みな新聞に書き続けるだろう。命を落とすことを知っていながら水銀の鉱山で採掘する連中のようにね。ほらあそこ、コラリーのそばに若い男がいる。なんて言ったかな、そうリュシアン。美男子で、詩人だ。おまけに、なかなか才気もある。いいかい、あの男は新聞という名の思想の悪所のどれかにこれから入るのだ。自分の一番美しい思想をそこに投げ込み、脳を枯渇させ、魂を腐敗させるだろう […] <sup>40</sup>。

バルザックはパリの文学生活を生き抜く作家として、ジャーナリズムを利用しながら『人間喜劇』という大作を作り上げていったわけで、リュシアンのように「脳を枯渇」させたりはしなかった。それにしても、思うように休養を取れないままにカフェインのもたらす刺激によって執筆を強行することがほとんど常態と化していたのも事実であり、クロード・ヴィニョンの言葉はバルザックの実感をなぞったものであるようにも思われる。バルザックが理想としていた創造のスタイルと、そこから逃げたいと思っていた現実の創造のスタイルが、それぞれ「脳」のイメージによって書簡中でかなり熟していたわけだが、それが『幻滅』という作品において明確な対比をもって現れ、作品世界の構造を支える一つのモーメントとなっていることが以上をもって

---

<sup>39</sup> Ibid., p. 432

<sup>40</sup> Ibid., p. 406-407

確認できたように思う。

#### おわりに

バルザックは、作家活動の始めにおいて既に「脳」に対して強い興味を抱いていたが、同時代の学説を正確に理解した形跡はなく、想像力によってその構造や機能を自分なりに把握するにとどまった。このような結末は、バルザックが人間とその精神を統一的に理解したいという野心を抱きながらも、自然科学については一つの専門領域も持つに至らなかったことを思い出せば、ごく自然なこととして理解されよう。しかしながら一方、小説家として日々創造するという日常経験を重ねるにつれ、バルザックは「脳」をそこから作品を引き出すべきある種の生産器官としてイメージするようになる。このイメージは、もはや哲学的とも科学的とも言えないわけであるが、過酷な実体験に根づいているだけあっておよそ固定観念と言うべきものを形成するに至る。その結果が『幻滅』における「脳」=「烟」や「脳」=「金鉱」といったイメージの効果的な利用として現われ、『人間喜劇』の世界に一つの比喩の網を作り出すこととなったのである。本論では一例しか挙げられなかったが、また別の作品において「脳」のイメージがいかなる展開を見せているか気になるところであるので、これについては稿を改めてまた取り組んでゆきたい。